

# 節分は心新たに生きていくことを誓う日

— 善光寺節分会に因み —

平成九年二月四日

善光寺住職 黒田 武志

はじめに

本日は、善光寺で節分会を始めましてから二十八回目を迎える日でございます。あいにくの雨模様でございますが、雨もまた、私たちが生きていく上でこの上なく大切に尊い自然の恵み、ありがたいなあという気持ちでみなさまをお待ちいたしております。

今から二十八年前、昭和四十四年の十二月二日にナリスの会長さまと伊藤喜三郎先生に仲人をしていただき私は結婚し、十一月からここに住み始めました。当時、私は東京からまいりまして、すぐアメリカで修行してからこちらにきましたので、この日野の地のご事情は皆目見当がつきませんでした。知っているお方も少なく、年が明け正月を迎え、そして二月。この月ほど

のようなかたちで地域のみなさまと触れ合い、  
仏さまのお話をさせていたただこうかと考えまし  
た。私の実家は栃木県の大田原市というところ  
でお寺をしておりますが、二月にはいつも、鬼  
は外、福はうち”の節分会をしております。  
それを思い出しとりあえず、どのくらいの方が  
集まってくくださるかばかりはわからないけれど、節  
分会を行ってみようと思いました。岩間社長さ  
まの自動車をお借りして、マスとダルマを三十  
個借りそろえました。それが第一回目の節分会  
で、私のスタートでした。あれから二十七回の  
節分会を無事に終え、本日二十八回目を迎えら  
れるのも、お檀家のみなさまのおかげと感謝い  
たしております。

### 節分の意味

さて、これから“節分”というのは、いった  
いどうして行われるのか、どういう意味がある

のか、そうしたことをお話したいと思えます。  
節分には豆をまきますね。こうした風習が行  
われるようになったのは室町時代のことによ  
うで、その時代の『看聞日記』という書物に、応  
永三十二年（一四二五年）、今から五百七十二  
年前に豆まきをしたという記述がはじめて出て  
います。鬼というと、おそろしいもの、悪いもの  
というイメージがあると思いますが、本来は、  
季節の変わり目にこの世に幸運をもたらしてく  
れる神のように考えられていたようです。そし  
て、それがだんだん、幸運を持ってくるとい  
うより、この世の災いを遠く世界へ持ち去って  
くれるものというふうになん少変化していきま  
した。

“節分”というと、今では一般に二月三日か  
四日の立春前日のことをさしますが、そもそも  
季節の分かれ目のとき、立春・立夏・立秋・立  
冬のことをいいます。中国の『二十四節気』で



は、冬至と夏至の間を二十四等分しています。

季節の分かれ目の中でも、これから春を迎えるという立春は、今日は寒いけれども明日からはどんどん暖かくなり、活気あふれ力沸くようすばらしい気持ちになれる日です。みなさまに差し上げたお札に「鎮防火燭」とありますが、日頃寒さを防いだり食事のためなどに使っている火にも感謝して、今日から心新たに生きていくという祈りがこめられています。また今年<sup>ひょうと</sup>は、十干でいうと、丁の年。丁というのは、草木も生い茂り、生命力あふれたすばらしい状態のこと。人の性格でいうと、人がよくやさしく、おだやかで、博識というまさに春の陽のような方が丁生まれの人です。すばらしいですね。

節分の風習について話を戻しますが、この風習のもとになったのが、「追儺<sup>ついな</sup>」という悪鬼、疫病払いの行事だといわれます。慶雲三年（七〇三年）、今から一二九四年前に全国で疫病がはや

り、多くのお百姓さんが死んでしまいました。

「もう、これ以上、苦しいこと、悪いことは来ないでほしい」と、お百姓さんたちは必死の願いを、鬼を払うといういい方で表すようになってきました。追儺式は、平安時代は宮中行事として盛んでしたが、次第に庶民のもとにうつってきて、民間の寺社の追儺として継承されていきました。その頃から追儺の意味は、国の平安を祈り、人々が食べるものに困らないように穀物が豊かに実るようにと五穀豊穰を祈るものへとなっていきました。

### 「福は内、鬼もうち」

節分には豆をまきますが、なぜ「豆」なのかといえますと、これは、古くから豆には邪気を払ってくれる力があるとされていたからです。「福はうち、鬼は外」といながらまくのは、邪気を払うときには大声を出す方が、鬼が退散

するという中国の故事に由来しています。

京都のある寺の節分会では、「福はうち、鬼もうち」といながら豆まきをすることで有名です。鬼もたいへんすばらしい役目をしてくれるよいものであるという考え方です。鬼は悪いものという考えで生きてきた人にとっては不思議な話ですね、ひとつ、こんな昔話をさせていただきます。

昔、あるところに三人の娘を持つお百姓さんがいました。ある日山の畑の草とりをしながら、お百姓さんはブツブツと、

「誰か草とりを手伝ってくれたら、娘の一人を嫁さんにやってもいいんだがなあ」

といいました。そのとき、どこからか大きな鬼が現れて、

「聞いたぞ。三日たったら娘をもらいにくるか  
らな」

と聞いて、畑の草をあつという間に取って消

えてしまったのです。さあ、たいへんです。お百姓さんは寝込んでしまいました。上の二人の娘は鬼のところへ嫁にいくのなど絶対嫌だといいましたが、心やさしい末娘は、行くといってくれました。何年かたち、娘から「子ども大きくなったので山のうちへ泊まりにきてくれ」と便りがありました。お百姓さんが嬉しさと心配とで飛んでいきました。鬼は、お百姓さんを食べたくてしかたがなく、負けたら食べられることという条件で、なわ作り競走や石食い競争などいろいろな勝負をしかけてきました。が、すべて、娘の機転によってお百姓さんの勝ちとなりました。次の日鬼がでかけている間に、

「お父さん、ここに千里車と五百里車があります。五百里車は水の上でも走れますから、これに乗って逃げましょう」

と娘がいい、お百姓さんと、娘の子と三人逃げだしました。しかし、しばらくすると鬼と、

仲間たちが追いかけてきました。大きな川を渡っていると、鬼たちはごくごく川の水を飲みはじめ、娘たちは引き戻されそうになりました。とっさに娘は、家を出るときに持ってきた鬼の宝・いくらでもご飯が増えるという魔法のご飯べらを取り出し、鬼に向かつてそのへらで自分の尻をペンペン叩き始めました。そのおかしさに鬼は大笑い。飲んだ水をドツと吐き出し、三人は向こう岸についてそのまま逃げることができました。

こういう昔話です。この話、たしかに鬼が悪もののように聞こえます。でも、きつとこれからこのお百姓さんは、自分の畑の草とりが嫌で楽しくないからといってブツブツ文句はいわなかったでしょうし、ましてや、わが子を人にやるといった無責任な言葉も絶対いわなかったでしょう。娘と孫とそれは慈しんで育てていったことでしょう。鬼は、「悪役」「憎まれ役」に徹

してくれたと私には思えるのです。仕事に、家族に満足する本当の幸せを鬼は教えてくれたのではないのでしょうか。

すばらしい季節に向かっていくスタートの今、私たちは、現在の生活、人間関係、仕事関係などに不満を持って日々暮らしていないかどうか振り返ってみましょう。何千何百年と伝わり後世に受け継がれている昔話には、不孝などこの世になく、人間は生きていることがすなわち尊く素晴らしいんだよと教えてくれるような鬼の話が多く出てきます。憎まれ役をかつてくれた仏さまのようにも思えるんですね。

節分の日は、自分をふり返り、心の中の不満、不安、憎みなど暗い部分を吹き飛ばして、明日から生き生きと明るく、希望に満ちた春のような新しい気持ちで生きていきましょうという、そんな日であると私は感じております。